



# 海外調査研究派遣報告 土師純一

(自由民主党・市民クラブ)

平成19年度選抜議員団の一人として海外での視察に参加させて頂きました。  
<1/28~2/8>

ドイツは社会構造の大きな変革の中で、地球環境時代の街づくりをしています。視察で感じたことは、ドイツでは州に権限が委譲され、自治体が策定したプランのもとパブリシヤスなファイナンス（公的資金）を活用し、市民が中心になって展開しているところに地球人としての心意気を感じました。

本市は創成期から中世の自由都市、近世の自治都市へと繁栄し、戦後は臨海と泉北ニュータウンの開発で、人口83.5万人、全国15番目の政令指定都市となりました。地方分権時代に都市間競争に勝ち抜くには組織をさらに活性化し、クリエイティブな発想による政策形成能力の向上が求められます。地方自治体においても、民間会社と同様に市民ニーズを調査分析し市民サービスの向上、税収入をアップさせる事が自治体経営の安定に繋がります。議会においては政治的ビジョンが大切であり、考えや知恵をカタチにして街の姿を提案する、これがミッションであると考えます。ドイツは「連邦共和国」で16の州が強い自治権を持った連邦制で地方分権の進んでいる国家です。平成期からわが国も中央集権から地方分権がすすめられており「地方分権」「民の力」「環境政策」の先進国・ドイツの自治体政策事例の調査研究ができたことは誠に光栄で、地域づくりや自治体経営のあり方について大変参考になりました。

フランクフルトはビジネス、エッセンはカルチャー、ミュンスターは自転車、ハノーバーは国際見本市、ライネフェルデはニュータウン再生、どの都市にも人に語れる都市像があります。21世紀的パラダイム（理論的枠組み）の政策逐行システムについて考えさせられました。

調査研究テーマは「環境」「青少年健全育成」「中小企業育成」「観光」「行財政」についての自治体政策です。フランクフルト、エッセン、ミュンスター、ハノーバー、ライネフェルデの各市は、どの都市も独自の政策展開をしています。地方自治体としての戦略的政策形成の必要性を強く感じました。どの都市にも「パッシブハウス」の建築原理が随所に見られ、地球温暖化防止への市民意識が高いレベルです。オフィス照明の省エネ、屋上太陽光パネル、コージェネシステム、断熱材、3層窓ガラス、CO2パネルや、風力、バイオガス、太陽光など自然エネルギーに対しても環境整備を進めています。「バウハウス」のデザイン性、芸術性、モダニズムな発想は、建築物をはじ



河村和久教授（マインツ大）と



ラインフェルデ市広報局長ピーターさん



老朽化団地を切って、ピラタイプに



団地1階部分を庭付き住宅に



団地1階部分を店舗に改修



5階建団地を集会所やオフィスに



河村教授が基本設計した日本庭園

め、街づくりに表現されています。フランクフルトでは「気候同盟」で環境政策、学校現場で環境教育、国際観光会議社で観光政策とマーケティング戦略、青少年育成とスポーツ政策、ヘッセン州経済公社で企業誘致政策と開発支援策、エッセンでは地域再生事業、IBAエムシャーパーク構想、近代産業遺産保存と観光政策、行財政改革、ミュンスターではブランド戦略、カーフリー地域戦略、ローカルアジェンダ21、自転車交通、ハノーバーでは市民農園「クラインガルテン」と「バイオエネルギー村」などを視察しました。

ラインフェルデ市のニュータウン再生事例は、「居住」と「労働」のバランスをとり、「環境」クオリティーを向上させ、職住近接の活気ある市街地へ再編した、思い続けてきた泉北ニュータウン再生への何よりもの参考になりました。

私にとりましてラインフェルデ市は今回の視察の最大のテーマです。それだけに思い入れの深いものとなりました。オープンビルディングという手法によるエコ団地再生プロジェクトは実に素晴らしいものでした。減築かどうか、人口規模の違いがあるにしても、高齢化、人口減少の中、多くの事案をまとめて試み、コンペ形式をとり、マスタープランの基に展開し、財政的にも無駄をおさえ、ニュータウンに活気が蘇った世界的にも数少ないニュータウン再生の世界モデルです。ラインフェルデ市についてはドイツ視察への参加が決まった後、NHKクローズアップ現代「蘇れニュータウン」のTV番組で知り、国土交通省の企画担当官から紹介頂いた団地再生研究会とのご縁からはじまります。選抜メンバーが別々の思いがある中で、他4名の皆さまのご理解が頂けたことなど感謝の念に余りありません。団地再生研究会副理事長の澤田教授（明治大）との出会いがあったことで視察の質が高まり、大坪教授（武庫川女子大）には来庁頂き事前勉強会をしたこと、現地同時通訳にラインフェルデ市と親交の深い河村教授（マインツ大）から現地で詳細のお話をお聞きできた事は幸運であり、澤田教授には心から感謝を申し上げます。昨年12月の本会議で私が大綱質疑をしましたように、本市としては、大阪府が開発し管理運営をしてきた泉北ニュータウンを、政令指定都市となり主体的に再生に向け取組む立場にあり、居住者は南区民である事を念頭に、将来どんな街づくりをするかという再生へのグランドデザイン、マスタープランを構築する義務がともなうという事です。手をこまねているばかりでは、街の潜在力が低下し、再生の時期を逸することになります。視察から学びましたことは、本腰を入れてニュータウン再生をするには、マスタープランと資金



バイオエネルギー村のみなさんと



クラインガルテン（市民農園）の小屋



フランクフルト市はやはりビジネス都市



エッセン市 IBAエムシャーパーク



ミュンスター駅前自転車ステーション



ミュンスター市には自転車専用信号が



ヘッセン州経済開発公社ケラー部長と

計画が最も重要で、住民の社会的問題意識が必要条件です。ドイツでは東西の壁崩壊後、社会的危機感が強まり連邦政府がニュータウン再生に動き出しました。泉北ニュータウンでは昨年以來、団塊世代の地域回帰、高齢化が急ピッチで進行します。都心ニュータウンでの限界集落化が叫ばれます。関西圏の南北軸都市格差による南大阪地域の都市イメージの低下、社会福祉住宅である大阪府営住宅の集中化による住民構成のバランス低下など、泉北ニュータウンの行く末を憂慮します。戦後本市の成長を支えた皆さまにとり、ベッドタウンの通勤地獄から開放され人生の楽しみはこれからです。しかし現状はいかがでしょうか。大半は集合住宅に暮らし、築40年の老朽化住宅、都市施設の陳腐化、コミュニティーの弱体化など第2の人生の舞台としては寂し過ぎるのではないのでしょうか。子どもたちは街から離れ、気がつけば一人となり、孤独死というのでは悲しすぎると思います。ハノーバーで視察した「クラインガルテン」も、緑農住宅政策を展開するヒントを秘め、私が提唱する「南区活性化は民の力」を実践できる糸口に思えます。団地再生、コミュニティー再生、ニュータウン再生とともに、新旧調和した新しい街づくりを実践するうえでも、周辺集落、旧村が抱える遊休農地や里地里山を活かし、人の健康と自然環境の保護を優先的に考えたライフスタイル「ロハス」な暮らしを送る、これこそが南区のシンタリティー（地域特性）です。

議員団が現地で調査研究をした成果として、今回視察を本市政策形成の一助に都市計画の課題を解決し、地方行政のパフォーマンスを向上させ、政令指定都市としてさらに風格のある街にしていきたい。

全国的にも情報発信できる、地方分権時代にふさわしい政令指定都市として、本市都市像を創らなければなりません。ドイツでの調査研究をもとに本市での政策形成に活かしていきたいと考えます。今後は調査研究内容を一層ブレイクダウンさせ、ディテールについての勉強を重ねて参りたいと思っております。最後になりますが、視察についての詳細は自身の「はぜ純一ホームページ」(www.haze-sakai.jp)でも公開しています。是非ご覧ください。今後ともご支援をよろしくお願い申し上げます。

詳しくは「はぜ純一ホームページ」をご覧ください。 [www.haze-sakai.jp](http://www.haze-sakai.jp)